

ゲーテと複式簿記

酒 井 文 雄

目 次

- I ゲーテの複式簿記観
- II お母さんの勘定書
- III 山本有三の会計観

I ゲーテの複式簿記観

文豪ゲーテは、『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』(1796年)のなかで、複式簿記に対して次のような讃辞を呈している。すなわち、「生粋の商人精神ほど視野の広い、また広くなければならない精神を、僕は他に知らない。僕等が僕等の仕事をそのなかで営んでいる秩序が、何という展望を僕等に得させてくれているだろうか。この秩序が、僕等が個々のものに困惑させられる必要なしに、僕等をしていつでも、全体を展望させるのである。複式簿記が、商人にどんなに便益を与えていることか。これこそ、人間精神の最もすばらしい発明の一つである (Es ist eine schönsten Erfindungen des menschlichen Geistes.)。そして、優れた世帯主なら誰でも、この複式簿記を家政に持ち込むべきである。¹」と。

多くの人達は複式簿記について語る時、このゲーテの複式簿記への一つの美事な讃辞に説き及ぶのであるが、大抵のばあいゲーテが同じ個処

1 Goethe [2] ss. 32-32. 関訳 62ページ, 佐藤訳 83ページ, 小宮訳 50-51ページ, 前田・今村訳 32-33ページ, 高橋・近藤訳 34ページ。なお, Muthesius [3] ss. 21-22. も, 参照。

でまた、この複式簿記に象徴される生粋の商人精神が陥り勝ちな最大の弱点をも指摘していることが、見逃されている。すなわち、ゲーテは述べている。「君は形式 (Form) から始める。それが恰も、中身 (Sache) でもあるかのように。しかし、君達は通常、加算 (Addieren) や残高計算 (Bilanzieren) に気を取られていて、一番大事な人生の総額 (das eigentliche Facit des Lebens) を忘れて²いるんだ。」と。

だが、『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』のなかで示されたゲーテのこのような意味深い複式簿記観といったものは、長い人生を机に向けて罫入りの帳簿を取扱って来た人でも、いま一つその真意を感得できないものかも知れない。何故かという、ゲーテによれば、生粋の商人精神にとっては、「形式と中身とは、ここでは一つのものに過ぎず、一方なしにはもう一方が存続せず……³」(Form und Sache hier nur eins ist, eins ohne das andere nicht bestehen könnte.)、「秩序 (Ordnung) と明晰 (Klarheit) とが、貯えたり儲けたりする楽しみを増してくれる。⁴」からである。

II: お母さんの勘定書

同一の問題を、もっと素朴に解明してくれるのが、「お母さんの勘定書」という次のような物語である(原文の仮名書きを、かなり漢字に直した——引用者)。

「朝早く起きた進君(原文では進さん——引用者、以下同じ)は、学校へ行く用意もすっかり済ませたのち、昨日なにか書きつけた紙を大事そうに持って、何処に置こうかと、しばらく考えていましたが、ここならば間違

2, 3, 4 Goethe [2] s. 33. 関訳 62ページ, 佐藤訳 84ページ, 小宮訳 51ページ, 前田・今村訳 33ページ, 高橋・近藤訳 34ページ。なお, Muthesius [3] s. 22. も, 参照。

い無く、お母さんが見ると思って、お母さんの机の上にその紙をそっとのせて、学校へ出かけて行きました。

進君があんなに熱心に書いて、お母さんに見てもらいたかったのは一体なんだったでしょう。……二つに折った紙には、次のように書いてありました。⁵」

かんじょう書き ⁶	
1. 市場にお使いに行きちん。	100円
1. お母さんのあんまちゃん。	100円
1. お庭のはきちん。	100円
1. 妹を教会につれて行きちん。	100円
1. 婦人会のときのおるすばんちん。	100円
ごうけい	500円
	進
お母さんへ	

「進君のお母さんはこれを見て、にっこりしました。

お晝が過ぎて、やがて、進君は学校から帰ってきました。夕食の時になりました。進君のテーブルの上には、今朝の勘定書と500円が、ちゃんとのせてありました。進君は大喜びで、お金を貯金箱に入れました。

その翌日です。何時ものように、進君は朝ご飯を食べようとする、テーブルの上に、一枚の紙があります。開いて見ると、それは、進君がお母さんにあげたような勘定書でした。⁷」

5 福音社編集部編〔1〕15-16ページ。

6 同書、16-17ページ。

7 同書、17ページ。

お母さんのかんじょう書き⁸

- | | |
|---------------------------------------|------|
| 1. 高い熱が出てハシカにかかった時の看病代。 | ただ |
| 1. 学校の本代。ノート代。エンピツ代。 | みなただ |
| 1. 毎日のおべんとう代。 | ただ |
| 1. 寒い日に着るオーバー代。 | ただ |
| 1. 進くんが生まれてから、今日までのおせわ代。みんなただ
ごうけい | ただ |
| | お母さん |
| 進くんへ | |

「進君はこれを見たとき胸が一杯になって、大粒の涙がもう少しでこぼれそうになりました。そして、泣き度くなったのをぐっと飲み込みました。

朝ご飯もそこそこに、進君は学校へ急いで出かけましたが、お母さんの勘定書と、進君の勘定書と、500円が一緒になって、進君の小さい頭の中を何時までもぐるぐるまわりをしていました。⁹」

こんにちのビジネスの世界では、多くの人達が、この物語りのなかの進君のような勘定をしていないだろうか。いや、ビジネスの世界だけではない。わたくし達の日常生活の大部分もまた、この進君の勘定のような算盤づくで占められていないだろうか。算盤づくの勘定で占有されたビジネスの世界がわたくし達の生活をいよいよ蔽いつくそうとしているこんにち、人生の真価は進君のお母さんの勘定にあることを静思するのは、わたくし達にとって、一服の爽快な清涼剤としての意味をもつのではないか、と思うのである。

8 同書, 17-18ページ。

9 同書, 18-19ページ。

III 山本有三の会計観

お金というものは、『真実一路』(山本有三)の主人公、義平——某社の会計課長——のいうごとく、その値打ちの他に、「いろいろ微妙なものを含んでいる¹⁰」。そして、このお金を最もビジネスライクに管理する勘定というものは、一面において義平の子、義夫の小学校の教師、矢津先生の抱いたような「一方で……なくしたものがあり、一方で、ふえているものがあるものですから……¹¹」といった単純な猜疑心を醸成するのに役立つと同時に、他面においては義平がこのばあい言っているごとく、紛失したお金を「取られたものもなく、取ったものもなく、どこかに落ちていたという……こんなふうに『けり』をつける¹²」といった複雑微妙なカラクリとしても使用され得るものなのである。その実直な人柄にもかかわらず、愛のない結婚のゆえに悲惨な生涯を終らねばならなかった義平の、養女しず子への遺書は、一体何をわたくし達に訴えているのだろうか。

義平は、そこで書いている。「いわば小生の一生は金銭登録器のようなものでした。金銭の出納、帳簿の整理は、毎日きちんきちんとやっておりましたが、その日、その日の帳あいは合っていても、私はもっと大きな帳あいを知らずに過ごしてきたのです。……私が何よりも残念に思う事は、自分が自分に生きなかったという事です。自分に生きるという事は、毛頭利己的に生きるとか、わがままに暮らすとかいう意味ではありませぬ。自分に忠実に生きなかったという事です。もっとひらたいことばで申せばうその生活をしたという事です。他人から『かみしも』を借りてきたために、あのことばも、やむなく、『さよう』、『しからば』の紋きり型を踏

10 山本〔4〕44ページ。

11 同書、32ページ。

12 同書、46ページ。

襲するよりほかになく、つい自分のことばを話さずにしまったということ
 13
 です。」と。

進君の小さい頭の中を、お母さんの勘定書と、進君の勘定書と、500円
 とが一緒になって、何時までもぐるぐるまわりをしたように、死を目前に
 した義平の頭の中を、何時までもぐるぐるまわりをしたものは、一体、何
 だったろうか。このことは、『真実一路』の読者にまかせるとして、わた
 くし達は何時でも、ゲーテや山本有三とともに、「肝腎の人生の総額」で
 ある「もっと大きな帳あい」を忘れないようにし度いものである。

〔付記〕内川菊義教授の古稀の佳壽を祝して、このささやかな一編（『関
 大教育後援会報』1960年12月5日号に所収の拙稿を補正した）を、献
 じます。教授の日頃のご懇情に感謝し、教授の一層のご加餐を切にお
 祈りいたします。

参考文献

- 〔1〕 福音社編集部編『ぎんのほし』（三育図書教育シリーズ2）福音社、1977年。
- 〔2〕 Goethe, J. W., *Wilhelm Meisters Lehrjahre* (Goldmanns Gelbe Taschenbücher, Bd. 527・528), München, Goldmann, 1959. 〔関〕 泰祐訳『ウィルヘルム・マイステルの修業時代の一』（『ゲーテ全集』第10巻）育生社、1947年、佐藤通次訳『ギルヘルム・マイステルの修業時代 上巻』（『ゲーテ全集』第4巻）丁字屋書店、1948年、小宮豊隆訳『ウィルヘルム・マイステルの徒弟時代 上巻』岩波文庫、1953年、前田敬作・今村 孝訳『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』（『ゲーテ全集』7）潮出版社、1982年、高橋義孝・近藤圭一訳『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』（『ゲーテ全集』第5巻）人文書院、1987年。
- 〔3〕 Muthesius, V., *Geld und Geist*, Ffm., Fritz Knapp, 1961.
- 〔4〕 山本有三『真実一路』新潮文庫、1955年。